

そして、小さな成果を共に喜ぶ関係が次の活力につながります。その中で必要な、本当の正しい情報をいかに得るか。学校に行けない分、全ての情報が不足していました。1番の不安の種である将来に対する見通し、目前に迫った進路に対する情報を得るため 学校訪問から始めたのです。そのとき高校の先生から「目的意識のはっきりした生徒をとりたい。学校に通える通えないが問題ではない。」との趣旨の話を頂いてそれまで「不登校生は高校に行けない」と思っていた生徒の中に学習に積極的に取り組む生徒が出てきました。自分の目標に向かって努力をすれば「中学校に行けない生徒が高校に行けるはずがない」そう思っていた生徒も進学的光が差してきました。もちろん学校としても積極的評価として本人の学力を評価するため、本人のできる範囲で課題の提示や試験などを取り組んでいきました。中学校3年間学校に登校することはほとんどできませんでした。友人と交流を続け県立高校に進学し、その後大学・就職と自分の夢を実現していきました。そのために継続的な保護者会や教員、SCなどの支えがありました。その後、転勤をする度に保護者会を作り活動をしていましたが、学校内だけの活動に限界を感じ、「ぼちぼちの会」は学校間を超えた活動を行う方向になっていきました。中学校時代だけでなく小学・高校・大学を含めたライフステージを通した支援(自立と社会参加・支援される方から支援する側に)が必要で、それはまさに校種間、学校間を超えた地域と時間の枠を超えたものが必要になっていきました。

学校は情報の拠点で、特に進路保障の情報が集積されています。しかし、学校に行けないことで、情報が得られないのであれば、正確な情報を他の方法で収集し将来に対する不安を払拭していくことや経験者からの体験を含めた意見交換・情報提供なども保護者会の重要な活動でしょう。保護者の会の中でいろいろな話を聞くことにより自分ではできない体験を知ることができる。新しい考え方や情報を知ることができる。そして、自分がきつい時はしっかりと支えてもらい、その時期を超えたら自分の経験や情報を伝えて、今度は支援者として支えていく。そのような支援の輪が繋がればいいと思っています。

現在、学校に行けない生徒が将来にわたってその状態が続くわけではない。その日のためにも一人一人ができる範囲で準備をしておくことが大切である。自分のできることをする。今できないことは無理をしない。学校に行けないのなら無理をして行かなくてよい。しかし、それ以外でできることも沢山あるはず。その情報を提供したり、支援したりすること。そして、その連帯を少しでも広げ、今、悩んで立ち止まってしまっている人に声をかけ、輪の中に入って共に進んでもらうこと。それが保護者会であり、学校と共同して進めることができればいいと思っています。いつか必ず支援を受ける立場から支援をする側に立って連携していければいいと思っています。本来学校と保護者は連携しこどもの教育に当たるものであり決してそれは保護者が一方的に学校から指導されるという関係ではないはずです。もっと教師も含めて謙虚にこどもとその保護者の声を聞き協力してこどもの将来を見据え今何ができるのかをしっかりと考えていくことが大切だと思います。